

国際障がい者ピアノフェスティバルアジア汎太平洋大会に参加して

川嶋 智子



24 歳になった娘の絢は、ダウン症の障がいを持って生まれました。幼い頃より音楽が好きで、5 歳の頃からピアノを習い始めました。音符をよむことができない娘は、もちろん楽譜もよめず、カタカナで書かれたドレミをみて曲の練習を始め、5 枚の楽譜の暗譜には約 1 年、リズム、曲想まで考えると 2 年の月日が必要です。もし娘に才能があるとすれば、一心に練習を続けることができるということで、今の娘があるのは、何より忍耐強く指導してくださった先生方のお力があってのことです。

そんな娘が 17 歳の時、初めて舞台上に立ち共に輝く仲間と場所を見つけたのが、ピアノパラリンピック（現国際障がい者ピアノフェスティバル）の舞台でした。会主催のバンクーバーやウィーンの大会への参加で、娘の世界は広がっていきました。どんな障がいがあるうと、たくさんの価値観を持つことは大切です。言葉だけではなく目や肌の色が違う人たちがいることを、違う大地があることを娘は肌で感じていきました。

ところが、予測もできなかったことでしたが、22 歳になり大人と子供のはざままで揺れ動く環境に適応できなくなり、娘は退行症状のひとつ、閉じこもりに陥りました。2 年以上の辛い時期を越え、ようやく出口が見えかけた娘が、今回の「赤とんぼ」の編曲部門に出たいと自分から言い出したことを、それまで見守るしかできなかった私達は、何より嬉しく思いました。今回、娘の力に合わせて編曲をお願いしたとはいえ、数ヶ月で 4 ページの楽譜

を暗譜することは容易ではなく、娘はただ無心に練習を続け、出場にいたりしました。

障がいがあっても、プロのピアニストと同じ東京文化会館の舞台に立ち、仲間達とのたくさんの出会いを経て共に輝けること、そして多くの皆様に、娘の紡いできた音を聴いていただくことが、どんなにか娘の時間を輝かせてくれることか、、娘達に輝ける場所を作り、また世界への発信を続けてくださっている迫田会長をはじめ多くの皆様の熱意とご尽力に、心から敬意を表したいと思います。

障がいがあるろうとも命の重さに変わりはなく、命を輝かせて生きて欲しい、これからも私達は、娘の世界で一番の応援団であり続たいと願っています。親馬鹿の小さな1歩が娘や仲間達を、世界に羽ばたかせることを祈りながら、、。